



心の中の生き物

中幡小学校 三年二組 福政 凜々子

この話は、大すきなねこのバーニーがしんでしまい、とてもかなしんでいる男の子が、父さんと母さんのやさしさにたすけられながら、少しずつ立ち直っていく物語です。

わたしが心にのこった言葉は、「バーニーはゆうかんでりこうだった。小鳥だっていっぺんしか食べなかつたし、見ているぼくの心をあたたかくしてくれた。そして今は土の中で花をさかせる手つだいをしてくれている。」です。なぜかというのと、「バーニーはいつも心の中で生きている、バーニーのいい所を見つけてあげなさい。」と母さんに言われたぼくが、バーニーのいい所を思い出したり、しんでしまったバーニーがこれからどうなるのか考えながら、少しずつ元気をとりもどしていく場面だからです。

わたしも、大切にかつていた青虫がさなぎになる前にしんでしまった事をおぼえています。その時は、とてもかなしくて食よくもあまり出ませんでした。家族はみんないるのにさみしい気持ちがありました。しんじたくない気分でした。しばらくたってから次は魚をかいました。温どやえさに気をつけながら、いつも話しかけたりとてもかわいがっていました。そのような世話をするのがしあわせでした。けれどもまた終わりがきてしまいました。でも、いつまでもかなしむのはや

めました。青虫も魚も、心の中で生きつづける事ができるからです。

作者が言いたかった事は、生き物は、しんでしまっても心の中で生きつづけているという事だと思います。なぜかという、わたしもそのようなけいけんがあり、それでも生き物たちは、心の中で生きているという事を、人につたえたい気持ちがあるからです。これは、とても大切な事だと思います。かなしんでばかりではなく、ちよくちよく思い出しながらわすれないでいる事が、大事なのではないでしょうか。そして、かなしみをのりこえる事で心が強くなり、今どはそれを生かしてさまざまな事をがんばれるような気がします。この本の男の子もきつとペットとのわかれをけいけんした事で、たくましい、思いやりのある人になれるような気がします。

それは、父さんと母さんのおかげでもあります。父さんだって、かなしかっただろうけど、いっしょにバーニーを土にうめる手つだいをしてくれたり、いろいろな言葉でなくさめてくれていたので、かん動しました。「バーニーのいい所を見つけてあげなさい。」と言ってくれたのは母さんです。わたしの場合も、一人ではかなしんでいたままだったと思います。わたしはこれから、小さな事でも、ささえてくれる人たちにかなししながら、毎日をすごしていきたいです。そして、かなしんでいる人の心をささえられる人間になりたいです。